

## 砂川慶介先生—追悼の言葉



故 砂川慶介先生

2015年も終わろうとする大晦日の明け方、突然鳴りだした自宅の電話で、砂川慶介先生が逝去されたことを知らされました。6年前から患っていたしゃった胃がんは、手術と化学療法により治癒したかのように見えていたのですが、転移病巣が見つかり、化学療法を続けていらっしゃった最中の出来事でした。10月に札幌市で開催された第64回感染症学会東日本地方会・第62回化療学会東日本支部総会合同学会（堤裕幸会長・坂田宏会長）では特別講演の大役を果たされ、その後も岡山市で開催された第48回日本小児呼吸器学会（尾内一信会長）、福島市で開催された第47回日本小児感染症学会総会・学術集会（細矢光亮会長）に参加されて座長の労をとられ、夜は研究室の仲間と街に練り出しておられたのですが、化学療法に伴う間質性肺炎が増悪し、帰らぬ存在となってしまわれました。入院中のベッドでは、毎年お正月明けに開かれる恒例の研究室の新年会を楽しみにしておられたこともあり、私は呆然とした気持ちで、しばらく受話器を握ったまま立ち尽くしていたような気がいたします。

砂川慶介先生は1966年3月に慶応義塾大学医学部を卒業され、慶應義塾大学病院でインターンを務められた後、1967年4月に、当時故市橋保雄先生が主宰されていた慶應義塾大学医学部小児科学教室に入室されました。関連施設の東京歯科大学市川病院小児科で研修された後、1972年1月に同教室に帰室され、1979年10月からは講師として、また小児感染症学、抗菌化学療法の専門家として、慶大小児科の屋台骨を支えていらっしゃいました。さらにその当時は小児科学教室の卒後研修責任者として、多くの若い小児科医の指導にあたられ、慶大小児科の歴史上、最も多くの入室者を数えたのは丁度その頃のことです。私自身も1976年に同教室の仲間に入れていただいた次第です。その後1983年2月に国立東京第二病院（現在の国立病院機構東京医療センター）小児科に移られ、同小児科医長を経て、1998年10月より北里大学医学部感染症学の教授に就任されました。そして以後北里大学の感染症部門の充実と発展に尽力されて来られました。この間、2005年4月～2009年4月には一般社団法人日

本感染症学会の理事長としてリーダーシップを発揮し、我が国における感染症学の基礎と臨床の発展に貢献されました。また2005年には日本感染症学会二木賞、2008年には日本化学療法学会志賀潔・秦佐八郎賞という、感染症・化学療法の領域の重要な学会賞をお取りになっていらっしゃいます。

砂川慶介先生は、その小児科医としてのご経歴の中で、一貫して感染症と化学療法の分野でのお仕事を続けて来られました。砂川先生の感染症・化学療法の領域における業績の中で特筆すべきことは、小児領域における抗感染症薬の開発です。小児領域における抗菌薬・抗真菌薬をはじめとする抗感染症薬の開発は、帝京大学の故藤井良知先生、大阪医科大学の故西村忠史先生、神戸市立中央市民病院の故小林裕先生を中心としたグループが担っていらっしゃいましたが、砂川先生はそのグループの中で中心的な存在として若手研究者をまとめられ、藤井・西村・小林の各先生方が現役を退かれた後は、わが国の小児領域における抗感染症薬の開発を束ねられてこられました。1970年代以降国内で開発されたほとんどすべての小児用抗感染症薬の開発を指導し、実践してこられたことは、皆さまよくご存知のことと存じ上げます。砂川先生のご研究の成果により、多くの小児が感染症の脅威から救われたということができると思います。また、優しく親分肌であったお人柄を慕って、先生のまわりには多くの人材が集まり、私も含めて大勢の小児医療、感染症を学ぶ後輩、そして抗微生物薬を開発する人材をお育てになりました。感染症を専門とする医師や、臨床検査技師、薬剤師、看護師など医師以外の医療職の育成にもご尽力され、日本感染症学会の専門医制度や日本臨床微生物学会の認定臨床微生物検査技師制度・

ICMT制度、ICD制度の確立に砂川先生の果たされた役割は極めて大きかったといえます。

さて本誌モダンメディアと砂川先生の関わりでございますが、砂川先生にはこれまで2編の記事をご執筆いただいております。「小児の腸管感染症」第33巻(1987)8月号掲載と「話題の感染症 肺炎球菌感染症」第47巻(2001)5月号掲載の2つの総説です。いずれも当時話題になっていた感染症について取り上げた内容であり、改めて記事を読ませていただきますと、それぞれの感染症の最新のデータを用いて、小児における問題点と対策について分かりやすく解説されており、砂川先生らしい文面を感じ取ることができたように思います。実は砂川先生には、昨年10月来、本誌“Master's Lectures”欄に「小児科領域の抗菌薬の開発の流れ」についてのご執筆をお願い申し上げておりましたが、掲載は叶わぬこととなってしまい、誠に残念で仕方がございません。

新たな耐性菌の増加にもかかわらず抗感染症薬の開発が滞りがちになっている昨今、砂川先生を失うことの意味はとても大きいのですが、これまで同じ感染症を志してきた後輩のひとりとして、また抗感染症薬の開発と一緒に携わらせていただいた者のひとりとして、砂川先生の遺志を継ぎ、これからも感染症と化学療法の発展に一層の努力を続けていく所存であります。偉大な先輩に厚く御礼を申し上げるとともに、ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

2016年7月7日

慶應義塾大学医学部感染症学教室／  
モダンメディア編集委員長

岩田 敏 記